

大阪商業大学学術情報リポジトリ

「脱亜論」からスタートする世界地誌教育の実践 —大学生の感想にみる地歴連携教材の有効性—

メタデータ	言語: ja 出版者: 大阪商業大学教職課程委員会 公開日: 2022-04-22 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 西岡, 尚也, NISHIOKA, Naoya メールアドレス: 所属:
URL	https://ouc.repo.nii.ac.jp/records/1169

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



「脱亜論」からスタートする世界地誌教育の実践

—大学生の感想にみる地歴連携教材の有効性—

西岡尚也

- 第1章. はじめに
- 第2章. アジア地誌を脱亜論からスタートする
- 第3章. 脱亜論を学んだ大学生への意識調査
- 第4章. 地理教育で脱亜論を教材にする意味
- 第5章. まとめと今後の課題

キーワード：地歴連携、興亜論、脱亜論、アジアの中の日本、教職課程の地理

第1章. はじめに

高校では1982年4月、それまで一つであった社会科が地理歴史科（以下、地歴科）と公民科の二つに解体分割された。当時高校教員であった私は現場の大混乱を経験した（西岡1999a）。その一方では「地理と歴史の連携」（以下、地歴連携）への期待も高まった。

公民分野ではいち早く従来の政治経済と倫理社会の内容を「連携」させた、教科書「現代社会」が登場した（1982年4月から使用）。しかし地歴分野では、地理・日本史・世界史の「連携」から、教科書が編纂されることはなかった。

図表1：『地歴高等地図』の表紙



（備考：左から、1998年版、2011年版、2020年版、これ以外の表紙もある。）

その後、帝国書院編集部編『地歴高等地図』（1997年3月検定済み、1998年4月から使用）が誕生した。これは地歴連携の趣旨から出版された画期的な地図帳＝教科書¹⁾になった（図表1）。

そして2022年4月より現場導入される「新高校学習指導要領改訂」では、公民科で新教科書「公共」が登場する。しかし地歴科では地歴連携視点の教科書は今回も編纂されず、地理分野と歴史分野は連携することはない。「地理総合」と「歴史総合」が全国の高校で教えられることになった。これでは科目名「地歴科」の趣旨とはほど遠く、「地理と歴史の隔たり」は旧態依然のままである²⁾。

地歴科誕生以降、地歴連携の方向やそのあり方を考察した研究には山口(2011)がある。「地理教育における歴史的要素の扱い」と「歴史教育における地理的要素の扱い」に着目し、過去の研究文献を「類型化」しながら整理している（山口2011、3～4頁、表2～3）。また寺尾（2008、2009、2016、2017）は中学・高校における歴史教育の経験から、地理歴史連携教材を用いた教育実践を報告している。

しかしながら、これらの大部分は日本地誌と日本史分野からの考察であり、世界地誌と世界史の内容を連携する教材実践は極端に少ない³⁾。小稿では世界地誌と世界史を結びつける地歴連携教材として、筆者がこれまで試みて来た「脱亜論」を用いた授業実践を紹介する。

第2章. アジア地誌を脱亜論からスタートする

(1) 高校「地理A」での実践例

筆者は高校教員時代（1981～2000年）に、地理（世界地誌）を教える際、どのようなスタート（導入）をすれば、学習者の関心・興味を引きつけられるかを考えた。通常日本の中学校・高校の地理教科書では世界地誌は、順番としてアジア州が最初に教えられる。

毎年の高校生諸君を観察していて分かったことは、「アジア地域学習」に興味を持ってスタートできないと、その後の学習意欲に結びつかず、ひいては地理全体への関心が減少してしまうことであった。ゆえに「アジア学習」には大きな意味がある⁴⁾。このような高校生の反応を参考にして、地理と世界史を毎年担当して私が思いついたのが、アジア地誌の導入に「脱亜論」を用いることであった。

このヒントになったのが当時使用していた世界史教科書、土井正興ほか編（1982）『新世界史』三省堂（1981年文部省検定）である。この教科書の単元「明治維新と東アジア」では、「列強のアジア侵略（図表2）」と、本文とは別に囲み記事コラムとして「福沢諭吉の脱亜論」（図

1) 小中高で使用される地図帳は文部科学省検定済みの教科書である。

2) 筆者は、2006年末に発覚した「世界史未履修問題」の原因が、地歴連携がなかったからである点を指摘した（西岡2008）。これをきっかけに、世界地誌と世界史分野を結びつけた教材の必要性を強く望むようになった。「地理総合」「歴史総合」の他に「地理探求」「歴史探求」の教科書も新しく誕生する。

3) 例えば山口（2011）では、長嶋（1965）、朝倉（1972）、水野（1982）、戸井田（1996）、齋藤（1997）、今井（2010）などが地理と世界史分野の連携例としてあげられているが、日本史と比較して、世界史分野との連携教材はまだ少ない。

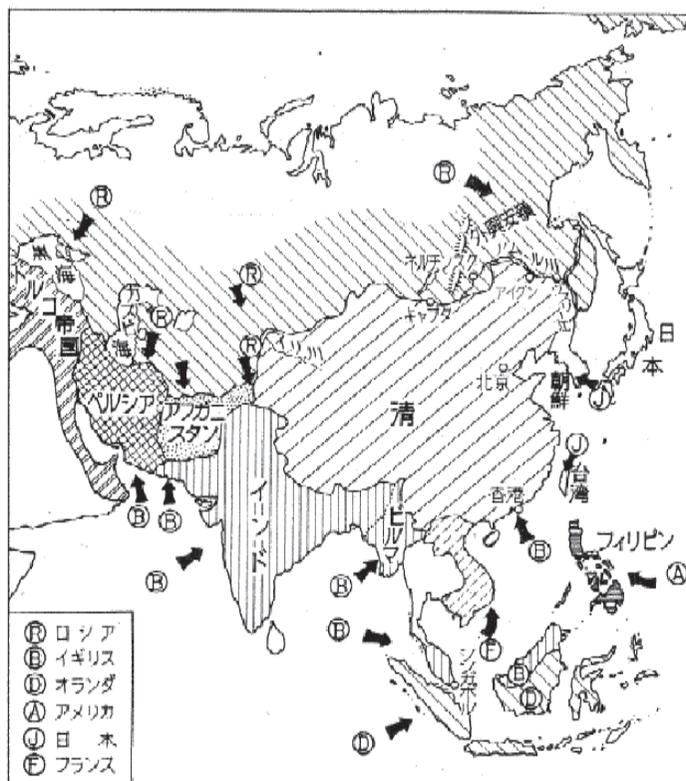
4) アジア地域に重点を置くことで、高い学習効果が期待できることは、坂口ほか（1993）や京都高等学校社会科学研究会編（1995、2003）でも報告されている。

表3) が連続で掲載されていた⁵⁾。とりわけ注目したのは図表2の凡例で、㉠=日本が欧米と同じ「アジアを侵略する列強」として表記されている点である。

新米教員の私にも、図表2と図表3をリンクした執筆者の「意図」が伝わり、うまく工夫されている画期的な教科書だった。「これは地理でも使える」と直感し、試行錯誤を繰り返しながら地理Aで「脱亜論」にふれる授業を実施した。

これ以後は毎年、地理Aで必ず「脱亜論」に触れることになった。こんな発想からスタートした教材であったが、予想以上に高校生諸君の反応は良かった⁶⁾。その後さらに発展させて、「興亜論VS脱亜論」で「ディベート授業」を試みたが、こちらはまだ完成には至っていない（図表4）。

図表2：「列強のアジア侵略」地図



列強のアジア侵略

(出典：土井ほか (1982, 217頁))

(備考：凡例には㉠=日本は欧米と同じ「列強」として表記されている。)

5) 当時の世界史教科書で「脱亜論」が登場したのは筆者の知る限りでは、本書が唯一であった。近年では「脱亜論」が無署名社説の文章であることから、福澤が直接執筆していないという研究もある（平山2008、2012）。これに反論する立場で安川（2000、2006）は「脱亜論」が福澤自身の主張であるとしている。また世界史以外の教科書では現在使用されている、浅子和美ほか(2021)『高等学校新現代社会』帝国書院(2016年文部科学省検定済)に、『福澤論吉が「脱亜入欧」を主張した』、という記述がある（浅子ほか2021、57頁）。

6) この時の高校地理Aでの実践や、板書例および受講生の反応・感想は、西岡（1999b）にまとめられている。

図表3：「福沢諭吉の脱亜論」

福沢諭吉の「脱亜論」

明治維新前後の日本の指導者層の中には、清国と手を結んで欧米勢力のアジア侵略に対抗しようとする考え方が、かなりひろくあった。特に自由民権派の一部には、日本の近代化を進めるとともに、朝鮮・清国の近代的改革に期待し、これと連帯しようとする主張があった。福沢諭吉も、はじめ朝鮮・清国の改革への期待を表明していた。しかし1885年、清仏戦争で清国が敗れ、フランスがインドシナを占領するなど、西欧のアジア侵略が激化すると、それに危機感を抱いた福沢は、「脱亜論」を主張するようになった。

“日本には隣国の開明を待つて、ともにアジアを興すの猶予あるべからず、むしろその位ぐわい（おくれたアジアの一国としての地位をさす）を脱して西洋の文明国と進退を共にし、その支那・朝鮮に接するの法も、隣国なるが故にとて特別の会釈えいしやく（遠慮の意味）に及ばず、まさに西洋人がこれに接するの風に従つて処分するのみ”（時事新報の論説）

こうした議論はその後の日本の近代化の方向や日本とアジアの関係のあり方に、きわめて大きな思想的影響を与えた。

（出典：土井ほか（1982、218頁）、下線は筆者が加筆）

図表4：高校地理Aでの実践例、ディベートをめざした教材（著者作成）

授業実践例3 ディベート

西岡尚也

「脱亜論」からの世界地誌スタート

地理A・Bとも1学期に地図・地形・気候をひととおり学習した後、2学期から世界地誌に入るが、最初のアジア地誌に入る前に、私は毎年「脱亜論」を取り上げている。これは生徒自身の「アジア」に対する「視点」「態度」を振り返る体験にもなる。

世界地誌のスタートと、近代日本と海外との関係を見ていく際、基本となる理論であると考えるからである。板書例では、日本の位置の変化（脱亜→入欧する）が、一目でわかるように工夫してある。

生徒は日本を客観的にとらえられるようになる。2学期にかけて世界地誌に入る際、この「客観的」な視点が重要となる。また当時、「脱亜」が絶対的な考えではなく、福澤も最初は「脱亜」と反対の「興亜」であったことを示す。そして日本はどちらにも進む可能性があったことを押さえる。

その後、レポート課題（38頁下段）・プリント資料（38頁上段）を配布し、賛成・反対・中立の立場から各自の意見を書いてもらう。本来ならディベートをしたいが、人前ではなかなか意見が出ないため、後日、代表的なレポートの意見をプリントにして配布し（40、41頁）、紙上ディベートとして授業を展開している。

（出典：西岡（1999b、39頁）、文中の頁数は出典内の頁数を示す。）

このような体験から地理における「アジア学習」のスタート（導入）に、「脱亜論」は学習者の関心・興味を促し大きな効果があると考えている。そして高校における地歴連携のみならず、大学でも「脱亜論」は優れた教材になるのである。また工夫すれば中学校でも学習者の地理分野や歴史分野への関心を高める効果が期待できる。

さらに、この実践では「脱亜論」を振り返ることで、過去のわが国の立場を「追体験」でき、それをきっかけに現在そして将来の近隣諸国との関係や、外交政策について考える機会を与えることになった。その具体的な例は、筆者の講義を受講した大学生の感想（レポートの回答）を紹介しながら、第3章で考察していくことにしたい。

（2）大学「地理学」講義での実践例

筆者は高校から大学教員に転職（2000年10月以降）した後も、担当した教養科目としての地理学、人文地理学概論、地域地理学、また教職関連科目の地誌学、社会科教育法などでは、必ず「脱亜論」を用いた講義を試みてきた。ただし大学では、「脱亜論」を全ての学生が「高校での学習経験がない」という前提で講義をおこなってきた。

大学講義（90分）では高校授業（50分）より、時間的な余裕があるので配布する資料、プリント教材を増加した。また説明方法でも「脱亜論（福澤論吉（2003）」全文の音読や「板書事項」（図表5・6）などを工夫した。

初期（脱亜論発表1884年以前）の福澤は「興亜論」を主張し、慶應義塾には朝鮮からの留学生を多く受け入れて来たこと、そして「朝鮮の革命家、金玉均と福沢論吉の交流（京都高等学校社会科研究会編1995、21頁、58～59頁）」などの説明を試みた。また図表7は、大学の講義「地理学」で毎年使用して来た教科書（テキスト）の関連資料である。

まず「脱亜論」（福澤2003、261～263頁）をプリント配布し、それを私自身が講義中に音読をおこなう。当時1884年の新聞「時事新報」の原文（雰囲気）を追体験してもらいたいからである。そして何より、記事全文に眼を通すことが重要であるとする。

少々長い文章でしかも古い語句もあるが、最後まで読んでみる意味は大きい。福澤論吉の

図表5：板書例：「脱亜論」前後の中国・朝鮮・日本の関係（著者作成）

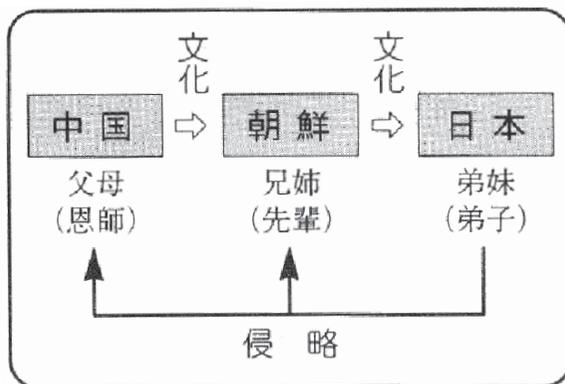
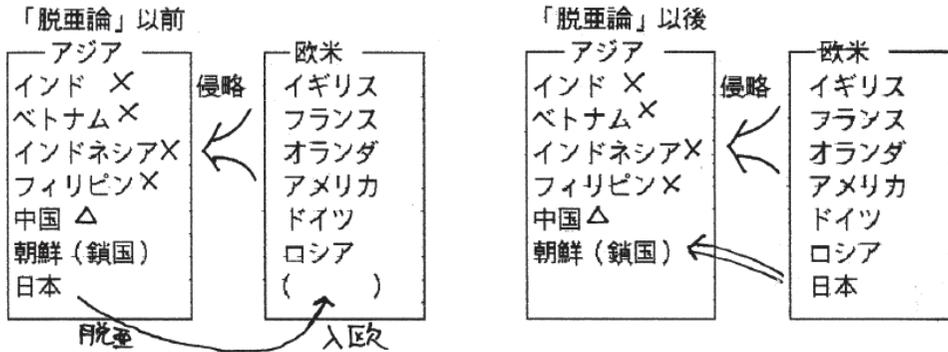


図1 文化の流れと日本の侵略

（出典：京都高等学校社会科研究会編（1995、12頁））

図表6：板書例：「脱亜論」前後の日本の立ち位置の変化 (著者作成)



(出典：西岡 (1999b, 39頁)、ロシアの下の () に日本が入るのがポイント)

図表7：「興亜論」から「脱亜論」への転換

侵略と対抗できると考えていた(今水一九七九、一七二一〜七三三)。慶応義塾にも、多くの朝鮮半島からの留学生を受け入れた。また福澤は門下生の井上角五郎(二八六〇〜一九三八年)を朝鮮に派遣して、現地で新聞を出して民衆を「開化」しようと考えた(鹿野一九七九)。そして朝鮮における一八八四年甲申政変の指導者、金玉均(一八六一〜一九四四年)らとの交流はよく知られている(宮佐藤一九九二)。

しかし最終的には、アジアの国と組んで欧米列強に対抗する「興亜」より、欧米列強と同様にアジアに侵略する「脱亜」の路線を選択した。以後この路線を突き進んできたのが近代日本であり、ある意味では今日においても「欧米志向」は続いているのである。

福澤20吉 (1834 ~ 1901)

「時事新報」に掲載された「脱亜論」(『沖縄タイムス』2006年1月24日付より)

● 脱亜入欧への地理教育

当時日本政府は「脱亜入欧」し、欧米列強の仲間入りをして「富国強兵」をめざしていた。このような政府にとっては、国民に「文明開化」に向かって明確な目標を示す必要があったと考えられる。すなわち、福澤・内田のめざす欧米中心の世界地誌の啓蒙は、日本政府の国家目標と一致していたのである。

清仏戦争で清国の敗北が明らかになった一八八五年、福澤は「脱亜論」と題した論説を新聞「時事新報」に書いた。次は日本が欧米列強の植民地として知られているという「危機感」を持ったことが、彼を「興亜」から「脱亜」へ動かしたのである。

福澤は当初(一八八五年清仏戦争以前)日本は、朝鮮や清国と組んで、アジアの連合により欧米の

(出典：西岡 (2006, 44 ~ 45頁)、地理学のテキストとして使用)

文章は「七五調のリズム」が用いられ音読する価値がある⁷⁾。しかも随所に、ユーモアや比喩があって、読み物としてもおもしろい内容になっている⁸⁾。間違いなく音読すれば学生諸君の興味を引ける「優れた文章」である。もちろん古典的な古い表現にはルビをうち、特に最後の4行は丁寧に解説を加えながら説明することをこころがけた。

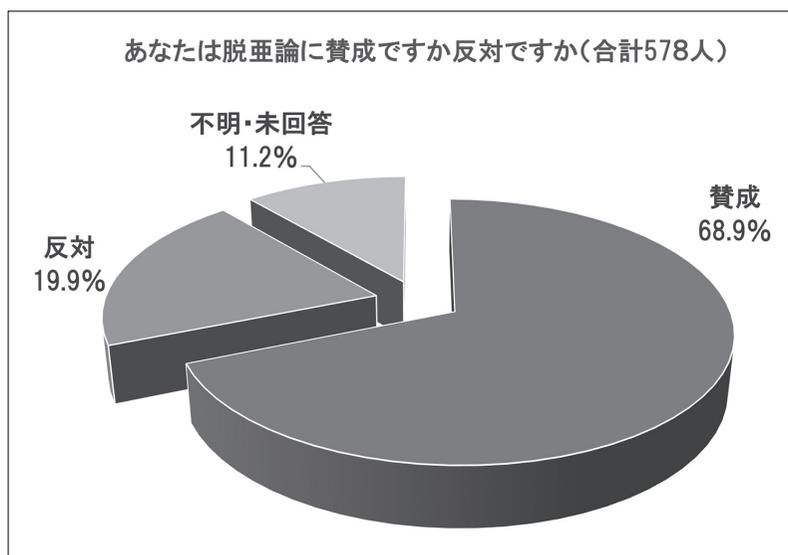
第3章. 脱亜論を学んだ大学生への意識調査

図表8：あなたは当時（1885年）の「脱亜論」について、賛成ですか、反対ですか。
その理由も書きなさい。（事前に質問を提示して、講義内に記入してもらった。）

講義名・実施日	賛成	反対	不明・未回答	合計
地理学Ⅱ（後期） 2019年1月30日	273人 (69.8%)	73人 (18.7%)	45人 (11.5%)	391人 (100%)
地理学Ⅱ（後期） 2020年1月28・29日	125人 (66.8%)	42人 (22.5%)	20人 (10.7%)	187人 (100%)
2年間の総合計	398人 (68.9%)	115人 (19.9%)	65人 (11.2%)	578人 (100%)

（備考：2021年と2022年の1月にはオンライン授業中心のためアンケートができていない。）

図表9：2019年と2020年受講生を対象とした結果（著者作成）



7) 「音読」というアイデアを用いた地理教科書の代表作が、福澤諭吉（1869）『世界国尽』（福澤2002、63～160頁）である（正式名称は福澤諭吉訳述『口頭大全世界國盡』）。当時まだ教科書のなかった日本では世界地理の教科書にも用いられた。さらに一般大衆にも普及して「大ベストセラー」になった地理書である（荒木2006、56～58頁）。

8) 脱亜論の文章は、前半と後半で表現が「急変」することにも注目したい。前半においては「論理整然」としているが、末尾の10行前後になって「物狂い」のようになり「投げつけことば」になっている（肥塚文博ほか1999、46頁）。筆者の推測では前半は福澤自身が執筆し、後半は弟子が付け足したのではないかと考えられる（沖縄タイムス2006年1月24日記事「ひと・アジア・歴史」）。

調査方法は事前にこのテーマ(図表8)を伝えておき、レポート試験の一部として実施(試験時間内に自由に書いてもらう)という形式を用いた。ふだんは無関心の学生が多いが、予想に反してこのレポートには多くの意見が書かれてきた。特に講義内で用いた「興亜論」と「脱亜論」のどちらに賛成かという、わかりやすい「二項対立」で問いかける手法が、良かったと考えている。

調査対象は、2年間の地理学Ⅱ(後期)受講生578人である。結果は、脱亜論に賛成が398人(68.9%)、反対が115人(19.9%)、不明・回答なし65人(11.2%)であった(図表8・9)。

この結果から、約70%の大学生が賛成意見を持ち、約20%が反対であることが明らかになった。そして約10%は不明・回答なしであった。

以下にはその「理由」の中から特徴的なものを抜粋した。賛成は(1)に12人分を、反対は(2)に12人分を掲載した。また賛成・反対ということではなく、課題(図表8)とは別に、全体として感想意見を書いていたものを(3)として掲載した。ただし(1)(2)(3)のいずれも原文が長文の場合は、意味を変えない範囲で要約している。

(1)「脱亜論」に賛成と、その理由

1-①福沢諭吉がその当時に脱亜論を発表したのは、すごく先のことを予測した考え方だと感じた。清仏戦争で清国が敗北したことで、次は日本かもしれないと考えたことがわかる。これは視野の広い判断であり、私は脱亜論に賛成する。現にサッカーでも日本で活躍した選手がヨーロッパのチームに移籍することが多い。もし興亜論なら日本のチームやアジアのチームに所属することになり活躍舞台が限定される。スポーツでも広い視野を持った選手は、アジアを出て各国チームに移籍することが多くみられる。そういった観点からでも脱亜論には賛成したい。

1-②「脱亜論」の記事を読めば、この思想には価値観や文化・教育や宗教、技術力など全ての視点が含まれている。また、大陸の国で外敵・異民族に国境が接する中国・朝鮮と、周囲が海に囲まれた島国の日本では立場が違うので、「興亜論」でいう「融和」は不可能なレベルにあった。もし日本が「興亜論」で強制的に協力を呼びかけても、民族浄化の方法になる。その結果「興亜論」に進んでも、大量の流血が必ず起きたと思う。

1-③歴史を見れば中国を中心に朝鮮を経由して、様々な文化が日本に伝わり、それが栄えた部分も多くあった。当時欧米列強が迫り来る中で、「興亜論」を主張しても、植民地にされれば元も子もない。実際に今も沖縄県の問題(アメリカによる基地占有)があるが、日本全体では、私たちは欧米語ではなく日本語で教育が受けられ、植民地にされることもなかった。これを考えれば私は「脱亜論」に賛成したい。

1-④当時はアジアの中だけを見ていては、日本の発展は見込めなかった。こんな日本の状況を変えるためには、すでに工業化した欧米諸国を参考モデルにしたのは正しい。しかしながら、アジアだとか欧米だとか、そんなグループ化はどうしても良いことで、大切なのは日本の将来だけであった。日本が良くなるためにはどちらのグループに属しても良いと私は考える。これからの日本はアジアにはアジアの強みが、ヨーロッパにはヨーロッパの強みがあるので「折り合い」をつけて、いろんな国と仲良くするべきである。

1-⑤日本は元来中国や朝鮮から多くを学んでアジアの隣国を敬っていた。しかし、明ら

かにアジアよりすぐれた欧米の技術を取り入れずに、「成長・発展」を停滞させるのではもったいない。仮に私自身でも、自分と同等、もしくは自分以下の知識を持つ友人よりも、視野が広くて多くの知識がある友人とつきあう方が、私の「成長・発展」になる。国の関係も同じことがいえるから、私は「脱亜論」に賛成する。

1-⑥当時欧米諸国は自分たちが「文明国」で、アジア諸国を「未開・野蛮」とみてアジア地域に圧力をかけた。この時代には「興亜論」「アジア連帯論」「小国主義論」もあった。しかしながら、これではアジアの近代化は見込めなかった。当時なら私も富国強兵をめざすことで政治的安定が望めると考えただろう。ゆえに脱亜論には賛成である。

1-⑦日本が「脱亜入欧」したため、アジア諸国には一時的に迷惑をかけた。しかし現在の日本はアジアでは少ない先進国になれた。実際アジアで最初のオリンピックも開催したりして、リーダー的な存在になっている。その一方で戦争をしてアジア地域を巻き込み、結果はアメリカなど連合国に敗れ、アジアの人びとに大きな犠牲をもたらし、原爆まで落とされてしまうことになった。これらを全て含んできちんと反省する必要がある。それでも今の日本の繁栄は「脱亜論」の方向に進んで来たおかげであるので、私は賛成である。

1-⑧福沢諭吉は当時アジア最大の強国の清が、フランスに敗れ「興亜論」では欧米と戦えないと考え、日本が植民地になる危機感を持った。そして「脱亜論」を発表したのは当然である。欧米に勝てないのなら「脱亜入欧」路線に変更して、自国を守るのは自然の流れであるから、私は脱亜論に賛成である。

1-⑨すでに発展している西洋諸国から学ぶ方が日本のためであり、長期的にもアジア全体の利益にもなると、福沢諭吉は考えていたのだと思う。きっとそれで日本は「アジアのお手本」になれると考えて脱亜論を唱えた。そして現在その通りになっている。

1-⑩この時代には、アジアが欧米列強の支配を受けつつあったことや、福沢の教え子らが朝鮮での革命に失敗し暗殺された。こんな要因が重なり「興亜」から「脱亜」への転換が福沢の中で起こったのだと思う。そして「脱亜論」の思想でたくさんアジア人に悪影響や犠牲をもたらした。しかしながら貧しい国も多いアジアで、現在まで日本が豊かな国として存在していることも事実である。また第二次大戦中に、東南アジア・太平洋地域を一時的であるが、欧米の植民地から解放したことも事実で、そのことがきっかけで多くの独立国が誕生したことから「脱亜論」は間違いではなかったと私は思う。

1-⑪当時の日本が「興亜論」から、軍事力で欧米列強に対抗しても失敗したと思う。一度「脱亜」をして、日本は国力をつけることができた。だから私は脱亜論に賛成したい。けれどもその後日本がアジアへ侵略をすることになったのも事実である。このことから福沢諭吉は日本では1万円札の人物だが、アジアの人の中にはマイナスの人物イメージを持たれることもある。この状況を日本の教育では教えておかないといけない。

1-⑫これまで親しかったアジア諸国との関係を抜け出して、西洋に近づく手段を素直に受け入れた当時の日本の姿勢は素晴らしいと思う。そういう行動を勇気を持って行おうとした人物が、1万円札に描かれていることから、脱亜論は正しかったといえる。

(2) 「脱亜論」に反対、とその理由

2-①脱亜論の結果日本はアジア諸国を植民地として支配をめざすことになった。それま

でのアジア諸国との「対等関係」が「上下関係」になり、周辺国との対立や混乱をつくってしまった。それが現在も続いている。これらの理由で私は脱亜論には反対である。しかしながら、欧米の「良い点」= (技術や社会・政治システム) を取り入れる考えは正しいといえる。これからは今までの歴史から学んで、アジア住民のことを第一に考えて日本は行動して行く方が良くと思う。私には反対しか選択肢はない。

2-②「欧米志向」と「アジア軽視」の意識や主張をさす意味では、私は脱亜論には反対である。西洋文化を取り入れることも大切であるが、現代において中国は、経済力で世界に大きな影響をもたらす大国になった。また韓国は日本に文化的に韓流ブームをもたらしている。このように今の日本にとって、中国・韓国は切り離すと大きな「マイナス」がある。したがって、将来的にも「脱亜」の方向はめざしてはいけないし、私は脱亜論には反対である。

2-③今日の日本の繁栄は「脱亜論」のおかげだし、もし「興亜論」の考えを継続していたら、多くのアジア諸国のように、欧米の植民地にされていたと思う。しかしながら今の日本は「経済的な豊かさ」だけで、実情は戦後ずっとアメリカのいいなりのように思う。私は日本にはもっと、アジア地域との交流関係を深めて、良い意味でアジアと手を組んでいってほしい。いつまでもアメリカの言いなりではなく、日本独自の意見を持つべきであると思う。

2-④幕末から明治初期の段階で、「脱亜入欧」をめざしたことは正しかった。なぜなら当時はアヘン戦争や不平等条約をみても、欧米の国力がアジアより優れていたのは明白であった。しかし、昭和時代に入り日本はアジア諸国との良好な関係構築を怠り、かつての欧米列強と同じ道に進んでしまった。これは「脱亜論」の延長であった。つまり私は「興亜論」と「脱亜論」のどちらか一つに絞って、アジア諸国との関係を築くのではなく、歴史や時代の時勢に応じて、「臨機応変」に対応していくことが肝要だと考える。したがって現在の日本が「脱亜論」の方向に進むのは絶対に反対である。

2-⑤アジア軽視の意識や主張にはとても賛成できない。この脱亜論の最大のきっかけは日本がアジアから離脱していると考えているからである。この脱亜論がなければ、もしかすると欧米列強に狙われて植民地になっていた可能性がある。しかしそれでもアジアから離脱し、欧米列強に仲間入りをしなくてもやれることはあったと思うので、私は反対である。

2-⑥私は脱亜論には反対である。なぜならメリットがないと思う。この当時欧米列強からの侵略に対応するというのには理解できる。けれども今となっては逆にアジアに対する偏見などを見直す必要がある。社会環境が違うので、技術などで格差ができるのは明らかである。しかし自分の身を守るために、仲間を見捨てることはありえない。現在は人道的な視点からNGO・NPO活動などがあり、人類全体が助け合う考え方が増えてきている。この方向で脱亜論に賛成する意味はなくなっている。

2-⑦私は脱亜論に反対である。当時の文明開化や富国強兵など明確な目標に向かって進む考えには賛成したい。しかし、欧米列強と同様にアジアに侵略するには賛成できない。この脱亜論の考え方が第二次大戦までの侵略行為にもつながっていったといえる。もしアジアの国々と手を組んで欧米列強に対抗していれば、第二次大戦後アジアの人々から見た日本は、もっと良い方向に変わっていたかも知れない。

2-⑧私は脱亜論には反対である。なぜなら欧米と仲良くするのはよいと思うが、わざわざアジアとの関係を遮断するのは間違いである。中国や韓国の方が欧米諸国より近いので、

貿易もコストが抑えられ有利である。また衣食住など伝統的文化や思想も欧米より近い。中国は人口世界一で経済も急成長していて市場も巨大である。日本は当時も今も、まず近隣諸国と仲良くすることが大切だと思う。

2-⑨現代から見れば脱亜論のせいで日本はアジアに植民地を広げていこうとした。それが今でも、中国や韓国との歴史問題につながっている。だから私は当時の日本が脱亜論に進んでしまったことに反対である。

2-⑩私は反対である。なぜなら脱亜論は明治10年後半から始まる欧米志向とアジア軽視の意識や主張である。私にはどうして当時の日本が「アジア軽視」を行う必要があったのか疑問である。それまでアジア諸国に、日本は助けてもらっていた。それによって日本は成長発展できたのに、自国が成長発展したらアジアを裏切るのは間違っていたと思う。

2-⑪私は脱亜論に反対です。反対と言っても「アジアを出るな」と言うのではなく、根本的に喧嘩が嫌いだからです。脱亜入欧だからといってヨーロッパと仲良くできていない。他に世界と仲良くする方法はないのでしょうか。日本だけが変わっても他の国が変わらない限り無理だと思うので、脱亜論に賛成する事でアジアと争いになるなら反対だということです。

2-⑫たしかに日本より優れている欧米と交流することは日本にとってもすごくメリットがあった。しかしその交流のためにアジア諸国との連携を辞める必要はないと思います。仮にそれで日本が成長したとしても日本に近いアジアとの関係が悪くなってしまうとダメージも大きいと思います。また欧米と同じ文明を取り入れると日本らしさがなくなってしまう気がします。私は日本らしい文化や技術などで他国から認めてもらいたいと思っています。だから私は脱亜論には反対です。

(3) 全体の感想に書かれた意見

※上記(1)、(2)以外に、感想として自由に書かれたものから、個性的なものを抜粋した。

3-①このテーマを学習するまで、私は「脱亜論」を福澤諭吉が、列強に近づくために唱えた意見だとは知らなかった。当時は周辺のアジア諸国からは良くない考えだと思われたかも知れない。しかし技術が進歩した欧米文化を取り入れることで、近代化が遅れていた日本の発展につながったと思う。「脱亜論」を学んだことで、今後は周辺のアジア諸国を大切にすることにより、多くの国に期待される日本になっていけるのではと思うようになった。

3-②今までは私は、福澤諭吉が偉人だと思っていた。しかし脱亜論を学び日本が周辺国を裏切ることになった歴史を知り、私の福澤へのイメージが変化した。そして、一部のアジアの人からは、今も福澤が嫌われているのを知った。したがって私は「興亜論」も「脱亜論」も、どちらか一方に賛成することはできない。これからは世界のどの地域とも外交を通して交流を深めていくのが、日本の立場として重要だと思う。

3-③私はこれまで「脱亜論」という語句は聞いたことがあったが、その意味や誰の考えなのかは知らなかった。この講義で「脱亜」とはアジアを出ることだと知った。また「興亜」の意味も習って、興亜の方がボランティア感があるので良いと思った。しかし当時の日本にはそんな余裕がなく、自国のことで精一杯だった。どうして日本人は最初はアジアの文化や歴史を尊敬して来たのに、明治以降は見下げるようになってしまったのだろう。こんなこと

を考えられるようになった。このことは私にとって大きな進歩になった。

3-④私は脱亜論は必要なかったと思う。脱亜論は時事新報という新聞に掲載の「無署名社説」だったことも知った。(福澤自身が直接唱えたかどうかは、疑問視する見方もある)。日本は欧米文化を取り入れてきたが、それに流されて、文化だけではなく外交戦略も欧米に学んでしまった。いずれにせよ今は先進国になった日本は、自国だけを優先せず、他の国のために何ができるかを考える方を、優先しなければならない。そして今後の日本のあり方は、欧米に流されるのではなくて、アジア文化を積極的に取り組むことで、アジア地域との関係も良い方向に改善できると思う。その結果日本は、世界からも尊敬される国になれると思う。

3-⑤福沢諭吉は日本では1万円になる人物であるのに、中国や韓国では侵略者と呼ばれることもあると知って驚いた。確かに脱亜するのはアジアの思想から脱却することで、周辺諸国に対して「アジアはダメ」と言っていることになる。だからアジア側から見ると怒りを持たれても仕方がないと思う。当時のヨーロッパはアジアを支配していて、アジア側からしたらヨーロッパには良いイメージがなかった。そのヨーロッパと組んでいく日本に「悪いイメージ」が持たれるようになったのも当然だと思えた。

3-⑥私は興亜論に賛成です。その理由はシンプルに日本はアジアに位置しているからです。しかし、どちらの意見にせよ今日本は戦争等がなく平和なので良い時代に生まれたなと感じました。

3-⑦脱亜論に対して自分は賛成の部分もあり、反対の部分もあります。良いように捉えたらアジアに日本の領土を増やすことになるけど、それが原因で、戦争などにもなりかねないかもしれないからです。

3-⑧「脱亜の意味」をしっかりと理解してから、脱亜論や脱亜入欧の考え方を、ひとくと面白いなと思いました。確かに日本以外のアジア諸国は、欧米の植民地になっている国がほとんどで、日本がアジアを裏切り自分たちだけ工業国として発展し豊かな先進国となっているのは事実だと分かりました。でも、脱亜論や脱亜入欧がなければ日本はここまで発展することもなかっただろうし、他の国と比べて安全で平和な暮らしはできなかったとも思いました。

3-⑨私は興亜論に賛成です。政府間の関係が悪くても国民どうしが仲良くなって交流を深められたらいいなと思いました。

3-⑩地理の講義で興亜論や脱亜論について学ぶなかで、脱亜論に賛成か反対かものすごく悩みましたが、私は賛成派です。他国とのつながりを増やして日本にもいろんな価値観を入れてほしいです。しかし日本には、これから大きくなっていく中国といい関係も保ってほしいです。

3-⑪アジアと日本の興亜論と脱亜論について学んだ。様々な意見があり面白かった。過去の人の考えや決断が、今の世界平和につながっているということを改めて理解できた。地理も面白くて楽しいが、歴史も面白いと思えた。

3-⑫興亜論と脱亜論について学びました。私は、どちらにも賛成です。なぜなら当時の日本は何もかも遅れていた。100メートル走に例えれば、最初は速く走るが、ゴールするころには、強国から一回り以上遅れていると考えます。少子高齢化で日本の国力は、年々弱くなり、きっと周りに置いて行かれるだろうと思います。そうならないためにたくさんの技術

を学び、たくさんの海外の人たちが、日本に興味を持ち住んでもらいたいと考えるようになった。

第4章. 地理教育で脱亜論を教材にする意味

長年大学で教職課程の地理を教えてきた荒井（2021、46頁）は、高校で地理を履修していない学生には、地理に暗記科目といった否定的イメージが強いとしている。またその原因としては、120時間もあった中学校地理で「網羅型地誌が中心：中学校教科書を見てほしい」と、中学校教科書記述方法の問題点を指摘している（荒井2021、46頁）。

中学・高校で「地理」を学ぶ際、世界地誌単元では、国々の分布、位置、資源や人口の分布などが紹介される。いわゆる「地名物産地理」、「網羅型地誌」といわれる地誌になる（荒井2021、46頁）。私の高校教師時代の体験でも、残念であるが「地理好き」よりも「歴史好き」の生徒が多かった。そして何より中学で学んだ「地理＝暗記科目」というネガティブなイメージを、高校で拡大してしまわないように私自身も苦戦していた。

これに対して「歴史がおもしろい」のは、History=story（物語）があり、具体的な人物や民衆の登場（ストーリー）が、学習者には人気のある要因になっている。私は「地理が単調」なのはGeography=geo（土地）をgraphy（描くこと）であり、網羅・羅列的（薄っぺらい）表現の記述が多く、歴史のようなストーリー性が少ないからだと考えている。つまり地理で「描かれる」各地域の特色や個性は、それだけでは、その地域の「人物」「民衆」の物語（ストーリー）としては、学習者に見えにくいのである。

地歴科が登場した当初、学部時代に地理学科で「歴史地理学」を専攻した私は、地歴連携が進み、地理教育の発展＝「暗記科目イメージの払拭」に期待した。しかしながら、高校現場ではこれはいまもいかなかった、その原因は、歴史と地理双方の教員（担当者教員）が、自分の専門分野に閉じこもり、境界を越えた交流をしなかったからである。教育現場は「変化」を望まず、むしろ「保守的」であった。「私は日本史しか教えない」「地理はこれからも担当しない」という先輩ベテラン教員も多かった。私は自身のこのような経験から地歴連携の難しさを強く感じた。

そしてこのままでは今回新設の「地理総合」「歴史総合」（2022年4月から必修履修化）は、さらに地理と歴史の分裂に拍車をかけるのではないだろうか。これでは「地歴科の解体分割」が高校現場で「強化」しそうである（関2021、45頁）。

将来10年後に、2006年末から2007年に発生したような、「世界史未履修問題」（西岡2008）が再発しないように願いたい。加えて私は「地理未履修問題」が発生する危険があると危惧している（西岡2020、173頁）。このような背景から、今回提示した授業実践＝「脱亜論」を教材にすれば、これが避けられるのではと考えている。

いずれにせよ残念だが、大部分の大学生は中学校・高校時代には、地理の「おもしろさ」を体験していない。そしてこれは学習者だけにとどまらず、中学高校の社会科教員側にも「地理が苦手」という指導者が多いのである。

これに関しては、吉水（2018、3～5頁）が中学社会科教員の約30%が「地理は苦手」と

いう意識を持っていると警告している。当然であるが苦手意識を持つ教師に習った生徒は、地理への興味・関心を持たないだろう。中高生にとって地理が歴史と比べて「おもしろくない」のは、内容そのものではなく、教える側（教員の資質）に大きな責任があるのである。

現在私が担当している教職課程の「社会科教育法」や「地歴科教育法」の受講生は、将来中学校や高校で社会科教員を志望する大学生である。受講生には「地理が好き」な教員になってほしい。そのためには教職課程で学ぶ学生には、地理と歴史に「領域の壁」をつくらせてはいけない。ゆえに地歴連携教材の視点から「脱亜論」を学ぶことには、社会科教員養成からも大きな意義があると考えている。

第5章. まとめと今後の課題

高校(20年)・大学(21年)と長年地理教育に関わってきた筆者は、社会科解体で「地理歴史科」が誕生したのをきっかけに「地歴連携」を模索してきた。そして「脱亜論」の教材化にたどり着いた。小稿はこの総括的な実践報告である。

この調査で学生諸君の感想から見えてきた「意識変化」は、以下の5点①～⑤に整理分類してまとめることができた(図表10)。

図表10：地理学習で「脱亜論」を学んだ学生諸君の意識変化まとめ

- | |
|--|
| <ul style="list-style-type: none"> ①「興亜論」と「脱亜論」という2つの考えを比較して理解できた。 ②明治期以後の日本がアジアとどう向き合ってきたかを歴史的に理解できた。 ③アジアと日本の将来の関係を考えるきっかけになった。 ④これまで欧米への関心が強かったがアジア地域への興味が高まった。 ⑤地理を歴史から学ぶことで、広い視点で世界全体が見えるようになった。 |
|--|

今回の実践では、学習者に「賛成」「反対」という価値観を問う方法を用いた。しかしながら学習者の思想や価値観で「正解」を求めることではない。したがって「賛成」「反対」「不明」も、その理由をしっかりと考えて書くことを、アンケート実施前に伝えている。

なぜなら、地域(空間)や歴史(時間)の変遷、国家や民族の立場や状況・時代によって、「世論は変化」するからである。したがって、社会科では思想の善悪を教え、価値観を押しつける授業になってはいけない。何より多様性を尊重する寛容な姿勢が大切である。

本稿で紹介した福澤諭吉の「興亜論」や「脱亜論」は、世界と日本を考える一つの事例である。そして「優れた教材の一つ」として考えられる。これをきっかけとして今後も地歴連携の教材化を工夫していきたい。皆様のご意見・ご感想をお待ちしています。

《謝辞》

今回、私の講義内で実施したアンケートに熱心に取り組み、貴重な感想・意見を回答してくれた大阪商業大学の学生諸君に感謝します。ただしコロナ渦で2021年度は十分な対面講義

ができず、本稿で用いたのは2018年度（2019年1月実施）、2019年度（2020年1月実施）のもので、高校・大学と長期にわたって、多くの方々に支えられ、授業・講義の機会が与えられたことに感謝して、御礼申し上げます。

《参考文献》

- ・ 朝倉福温（1972）「世界史と地誌の接点」地理17巻1号
- ・ 浅子和美ほか（2021）『高等学校新現代社会』帝国書院（2016年文部科学省検定済）
- ・ 荒井正剛（2021）「おもしろさと学びがいを感じる地理教育を！」地理66巻11号46頁
- ・ 荒木一視ほか（2006）『小学生に教える地理－先生のための最低限ガイド－』ナカニシヤ出版
- ・ 今井英文（2010）「高等学校地理における東西ドイツの分裂と統一に関する授業実践－人物に着目して－」地理教育研究、No. 6、33～37頁。
- ・ 沖縄タイムス（2006）「ひと・アジア・歴史」2006年1月24日付、新聞記事
- ・ 京都高等学校社会科研究会編（1995）『アジアに強くなる75章』かもがわ出版
- ・ 京都高等学校社会科研究会編（2003）『新アジアに強くなる75章』かもがわ出版
- ・ 齋藤毅（1997）「地理教育における近現代史の展開に関する一試論」東京学芸大学紀要第3部門、社会科学1997
- ・ 坂口慶治ほか（1993）『アジアの何を見るか』古今書院
- ・ 関信夫（2021）「地理必修化のその先は？」地理66巻11号45頁
- ・ 寺尾隆雄（2008）「日本史授業の中の地図利用－日本史と地理の接点を考える－」地理教育研究 No. 1、74～78頁
- ・ 寺尾隆雄（2009）「日本史教師の眼からみた中学校新学習指導要領（地理的分野）」地理教育研究 No.4（臨時増刊号）10～11頁
- ・ 寺尾隆雄（2016）「景観・鳥瞰図・地図を導入に用いた日本史地歴連携授業の実践」全国地理教育学会全国大会発表要旨集第10号、8頁
- ・ 寺尾隆雄（2017）「新学習指導要領中学校社会科歴史的分野改訂における地歴連携の一考察－教科書記述の問題点と鎖国の概念について－」地理教育研究No.21、34～35頁
- ・ 戸井田克己（1996）「世界史における文化圏学習と風土－ヨーロッパ中心史観の克服と地理の役割－」歴史学と歴史教育、歴史学と歴史教育の会51、12月
- ・ 土井正興ほか著（1982）『新世界史』三省堂（1981年3月文部省検定済）
- ・ 長嶋安男（1965）「中学校社会科地理における世界史の取り扱いについて」歴史教育13-12
- ・ 西岡尚也（1999a）「新学習指導要領にみる地理教育軽視の方向－高校「地理歴史科」における地理を例として－」岐阜地理第43号、152～156頁
- ・ 西岡尚也（1999b）「脱亜論からの世界地誌スタート」、地理44巻8号、38～41頁
- ・ 西岡尚也（2006）『子どもたちへの開発教育－世界のリアルをどう教えるか－』ナカニシヤ出版
- ・ 西岡尚也（2008）「高校世界史未履修問題にみる社会科教育の課題－大学生へのアンケートと新聞報道を中心に－」社会科論集2008高嶋伸欣教授退職記念、琉球大学教育学部社会科教育講座、65～77頁
- ・ 西岡尚也（2020）「書評：千葉県高等学校教育研究会地理部会編（2019）『新しい地理の授業－高校「地理」新時代に向けた提案－』二宮書店」人文地理72巻2号172～173頁

- ・ 水野敏雄 (1982) 「歴史的分野と地理的分野との関連－イスラム世界と十字軍の授業実践例－」月刊歴史教育4-8
- ・ 福澤諭吉 (2002) 『福澤諭吉著作集第2巻、世界国尽 窮理図解』慶応大学出版会
- ・ 福澤諭吉 (2003) 『福澤諭吉著作集第8巻、時事小言 通俗外交論』慶応大学出版会
- ・ 平山洋 (2008) 『福澤諭吉－文明之政治には六つの要訣あり－』ミネルヴァ書房
- ・ 平山洋 (2012) 『アジア独立論者福沢諭吉－脱亜論・朝鮮滅亡論・尊王論をめぐって－』ミネルヴァ書房
- ・ 安川寿之輔 (2000) 『福沢諭吉のアジア認識－日本近代史像をとらえ返す－』高文研
- ・ 安川寿之輔 (2006) 『福沢諭吉の戦争論と天皇制論－新たな福沢美化論を批判する－』高文研
- ・ 山口幸男 (2011) 「地理教育における歴史的要素の扱いに関する考察－歴史地理の時代の到来か－」地理教育研究No.8、1～8頁
- ・ 吉水裕也編 (2018) 『本当は地理が苦手な先生のために－中学社会地理的分野の授業デザイン&実践モデル－』明治図書
- ・ 肥塚文博ほか (1999) 『新「アジア学」事始め－21世紀世界と日本の進路を求めて－』晃洋書房